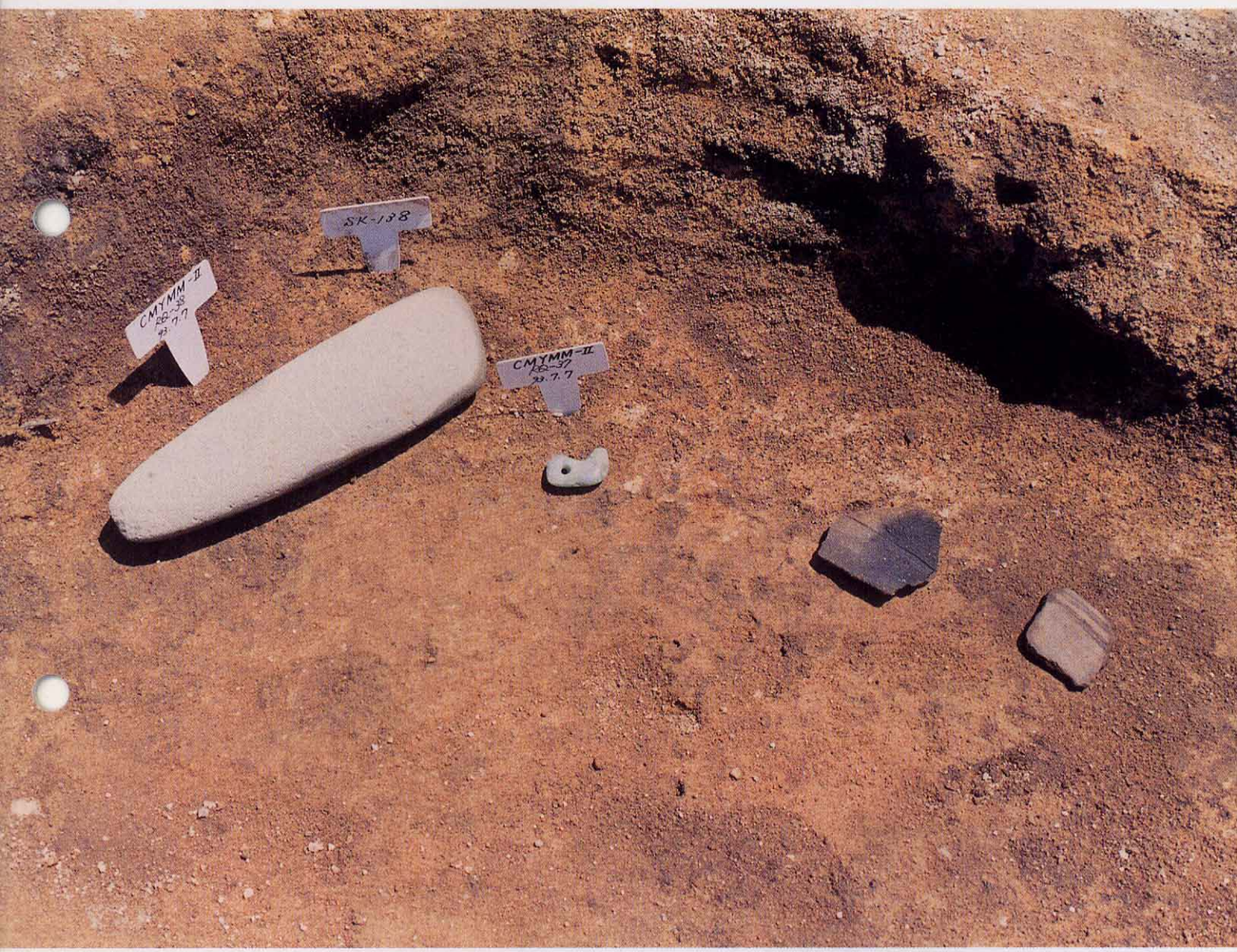
ISSN 1341-4046

埋文やまがた

2001年2月28日
第19号



村山市宮の前遺跡 ヒスイ製勾玉の出土状況

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
YAMAGATA PREFECTURE ARCHAEOLOGY CENTER
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301㈹ FAX 023-672-5586

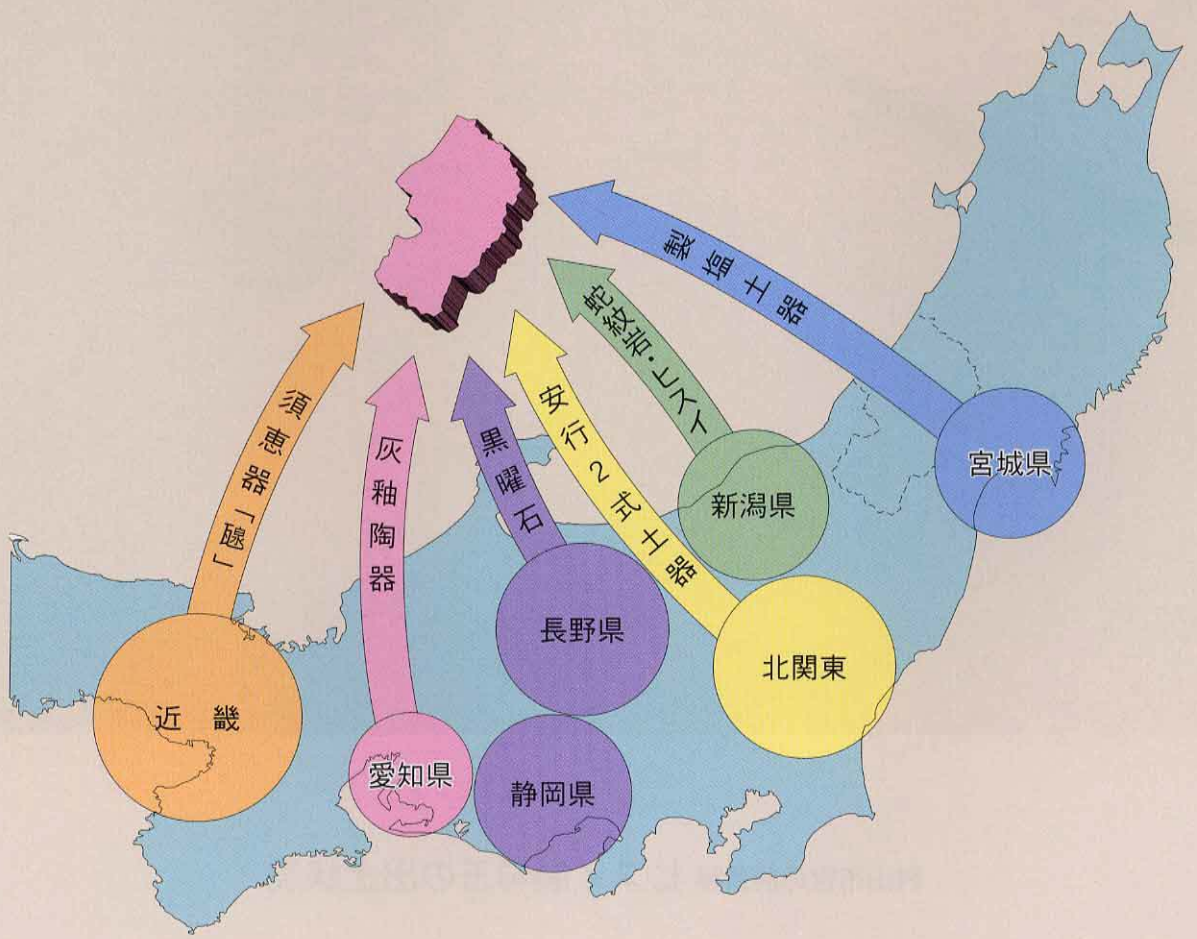
特集 山形県内へ移入されたモノ

～モノが動く・人が動く～

山形県内の遺跡で出土した遺物の中には、他県の原産のものや、他地域で生産されて山形県内に移入されたモノがたくさんあります。それらは、他地域との交流関係を知る貴重な手がかりになっており、また、文化が他地域の人々との盛んな交流のなかで生み出されたり、発展していったりしたものがあることを物語っています。

今回は、縄文時代から奈良・平安時代までの山形県への主な移入品を取り上げてみました。（中世・近世は、次号で特集します。）

モノが移動するときには、必ず人も動いています。当時の人々が石器や土器を手に入れるためには、どんなルートを通って、どこまで行って（または来て）、どんな会話をしたのでしょう。それを見たとき、また手に触れたときにどんな感動があったのでしょう。そんな思いを馳せながらページをめくってみて下さい。



ふる里は新潟！

小国町千野（せんの）遺跡

南から撮影した遺跡の全景です。右手を横川が北に向かって流れています。

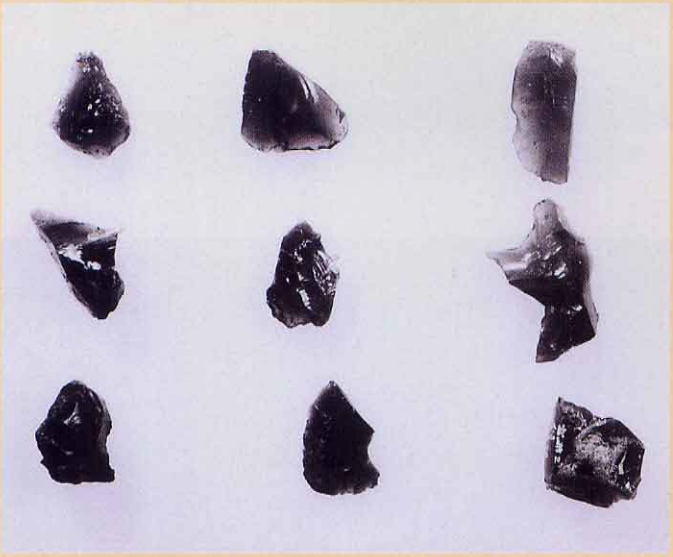
遺跡のあらまし

- 縄文時代後期前葉の遺跡です。
- 小国町箱ノ口の横川左岸に広がる段丘上が遺跡範囲です。
- 季節的に使用したキャンプサイトのような遺跡で、県内で初めての敷石住居跡や、まつりに用いられた配石・立石構造などが見つかっています。
- 縄文土器の文様には北陸地方、特に新潟県の影響をうけたものが多く見られます。

磨製石斧

石を磨いてつくった斧で、石材の「蛇紋岩（じゃもんがん）」は糸魚川周辺に集中して産出します。近くには、この蛇紋岩を利用して大量の石斧を製造していた寺地遺跡や、境A遺跡などの工房跡があることから、この石斧もあるいはこれらの工房でつくられ、もたらされたものかも知れません。

参集のムラ！



ヒスイ製の勾玉（まがたま）

縄文時代のヒスイは、飛騨山脈で生成したものに限られるようです。これらが姫川や青海川によって運ばれ、蛇紋岩製石斧と同様、寺地遺跡や境A遺跡などの工房跡で玉類に仕上げられ、各地にもたらされました。

上の写真左側のものは、墓と考えられる穴（表紙）の中から、石斧とともに並べられた状態で見つかっており、副葬品と推測されます。

黒曜石

石器をつくるとき、打ち欠いた細片が多く出ます。発掘調査でこの細片が数多く出土していますが、その内10点について産地同定を行ったところ、県内の月山（がっさん）産出のものに混ざって、静岡県熱海市や長野県下諏訪町からもたらされたものがあることがわかりました。

村山市宮の前遺跡

土器捨て場を調査している様子です。敷きつめたように土器が散乱しています。

遺跡のあらまし

・縄文時代晩期が主体の集落跡です。

・遺跡は富並川より約200m離れた河岸段丘上に立地し、段丘に沿って南面しています

・４ケ所の土器捨て場が確認されました。中でも左の写真の第３捨て場では、後期末から晩期末にいたる約800年間の遺物が、順序よく堆積していることがわかりました。

注口土器

右は、北関東で安行２式と呼ばれる土器で、上の写真の捨て場から出土しました。注口土器の口縁の一部と思われます。口の部分にきざみの入った突起をもつのが特徴です。東北地方でも出土例がほとんどない貴重なものです。

製塩土器

海水を煮詰めて塩をつくるための土器は、火のまわりを計算するためか、底が小さいもの、尖っているものが多いようです。左の土器は宮城県太平洋岸からもたらされたと考えられます。これまで製塩土器の分布は、仙台湾岸のみと考えられていましたが、奥羽山脈を越えて県内にも分布することが明らかになりました。塩の容器としてこの地にもたらされたものかも知れません。

本場、畿内産！

山形市向河原遺跡

遺跡のあらまし

- 古墳時代と平安時代の集落跡です。
- 山形市北部を流れる白川左岸の自然堤防上に立地します。
- 遺構は平安時代のものが中心で、17棟の竪穴住居跡や15基の井戸跡などが見つかっています。
- 古墳時代の遺構は、竪穴住居跡１棟と土坑１基が検出され、中から当時使われた土器が見つかっています。

須恵器「瓿」

祭祀用につくられたと考えられる古墳時代の壺の一種です。胴体には小さな孔があいており、ここから竹の管などを差して液体を注いだりしたものと推測されています。

畑の耕作土の下から見つかったもので、口の部分だけが欠けていました。

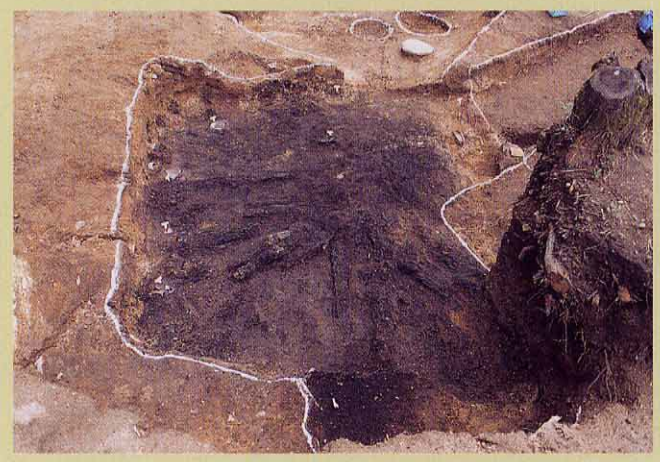
この製品は、現在の大阪府にある当時の一大生産地、陶邑窯で焼かれたものと思われます。

愛知の逸品！

寒河江市富山（とやま）2遺跡

遺跡のあらまし

- 奈良～平安時代の集落跡です。
- 谷あいの地滑り地帯にあるせまい平場に立地しています。
- 小振りの竪穴住居跡が多数重複して見つかり、床面からロクロの心棒を差したと思われる穴の跡が確認されたことから、土器をつくる工人たちの集落と考えられます。



灰釉陶器「水瓶（すいびょう）」

焼失した竪穴住居跡の壁ぎわで、炭化材の中に散乱した状態で見つかりました。

木灰汁をかけて窯で焼き上げるものを灰釉陶器といいます。この水瓶は、首の部分に２本の沈線が巡っています。愛知県にある猿投（さなげ）窯で焼かれ、流通したと考えられます。

火事で再び火をうけたため、表面の上薬がはじけ飛んでいました。

国指定史跡

天童市　西沼田遺跡（にしぬまたいせき）

天童市の西部では、急ピッチで東北中央自動車道の建設が進められています。盛土工事が一段落し、周辺は深い雪に覆われています。西沼田遺跡は南北に横たわる自動車道のすぐに西、静かな水田地帯に眠っています。

西沼田遺跡周辺の水田は、昭和50年代後半から、大型農業機械が動きやすく、水の管理をしやすくするための改良の工事が行われました。それに先立って実施された発掘調査で、古墳時代（約1500年前）の柱を打ち込んだ建物や木製の道具が良好な状態で発見されました。高い水位が、古墳時代の木材を大切に守り続けたようです。モミや竪杵（たてぎね）、鍬（くわ）等が出土していることから、西沼田遺跡は米づくりのムラであったことがわかります。

近年の調査の結果、建物群の北東側から、水田の畦（あぜ）が発見されました。水が水田にうまく流れるように調整したのでしょうか、建物群の近くを流れる河川跡には、水をせき止める施設が設けてありました。また、新たな建物群の広がりが確認され、丸太材を敷き並べた上に樹皮を敷いた建物の床構造の一部が解明されました。西沼田遺跡周辺で調査された古墳時代の集落では、安定した地盤に竪穴住居が作られていました。周辺の遺跡では、柱を打ち込んだ建物で構成する西沼田遺跡とは大きく異なることが分かります。沼田と名前が付くような地盤の安定しないこの地に、ムラができたのは、目の前に広がる水田などを管理するのに便利だったためでしょうか。

西沼田遺跡は、これまでの調査成果をもとに、今後整備が予定されています。遺跡周辺の景観は大きく変わろうとしていますが、西沼田遺跡とその出土品は、米づくりをして暮らすムラの様子をこれからも語り続けてくれるものと期待します。

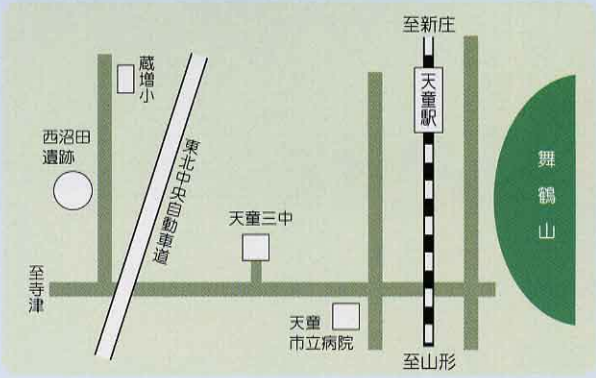
（高桑弘美）

Illustration©KurosakaHiromi

古墳時代の建築部材が横たわっています。

水の流れを調節する施設です。

水田の畦



資料提供：天童市教育委員会

「埋文やまがた」の購読について

広報誌「埋文やまがた」購読ご希望の方は，当センターまで電話にてお問い合わせ下さい。

なお，郵送料はご負担いただきます。

電話 **023(672)5301**（代表）

編集後記

立春が過ぎましたが、年明けから大雪や寒い日々が続いています。３月を控えて今年度の整理に加え、新年度の準備も始まっています。毎年のことながら、３月が60日くらいあればなぁ～と思うのは私だけでしょうか？（新）